

「臨床の知」の科学

THE SCIENCE OF "CLINICAL KNOWLEDGE"

杉原 一昭

(東京成徳大学)

Kazuaki SUGIHARA (Tokyo Seitoku University)

要 約

臨床心理学で要求される知とその科学は、自然科学をモデルとした従来の心理学とは異なるべきである。一つには実際の生活の中で起こる現実問題の解決のための学問、二つ目は自ら新しいシステムを創出できる学問、第三には、環境によって人間は大きく変わることを明らかにする学問、でなければならない。ここでは学問におけるモード論、オートポイエシスという生命および心のシステム論、およびアフォーダンス心理学の立場からこの点を論ずる。

キーワード：臨床の知、モードⅡ、オートポイエシス、アフォーダンス、生態学的妥当性

1 問題の所在

「臨床の知」とは何か。中村(1992)は、臨床の知を「医学的臨床のための知や医学の分野の知を意味するものではなく」「領域を越えて必要とされてきている知の一般的な在り様を指す」(p. 10)としている。そして、「臨床の知」は近代的なく科学の知」と対比して次のようにまとめている。

「科学の知は、抽象的な普遍性によって、分析的に因果律に従う現実にかかわり、それを操作的に対象化するが、それに対し、臨床の知は、個々の場合や場所を重視して深層の現実にかかわり、世界や他者がわれわれに示す、隠された意味を相互行為のうちに読み取り、捉える働きをする、と。」(p. 135)

科学の知は冷ややかなまなごしの知、視覚独

走の知であるのに対し、臨床の知は諸感覚の協働にもとづく共通感覚的な知である。また、科学の知は、仮説と演繹的推理と実験の反復から成り立っているのに対し、臨床の知は、直感と経験と類推の積み重ねから成り立っている、ともいう。

科学的というふつうは自然科学を意味するが、そこでは原因と結果の関係、その普遍性(反復性)が重視される。従って、大量のデータや実験の繰り返しが必要になる。しかし、臨床の知では、具体的な現実、経験、直感が重視される。

いままでの心理学では自然科学的手法が主流を占めていた。わが国の心理学の代表的な専門雑誌(「心理学研究」や「教育心理学」など)では、主に実験か調査という方法によって実験の繰り返しや質問紙で大量のデータが集められ、数量

化され、統計学を使ってそれらのデータが処理され、general theoryをつくる、このように研究が進められるのがふつうであった。

しかし、このような自然科学的手法だけで心理学上の多くの課題が解決できるかどうかについて疑問が出されている。特に、実践的、現実的な問題解決には他の手法を用いる方がより適切である。

この小論では、臨床の知を、実際の生活の中で起こる現実問題の解決のための学問としての「学問におけるモード論」、自ら新しいシステム

表1 モードIとモードIIの対比 (杉原 1999)

モードI	モードII
disciplinarity or inter-disciplinarity	trans-disciplinarity*
discipline 内の論理に従う	disciplin にはない独自の理論構成, 研究方法, 研究様式をとる。
discipline 内での問題を研究する。	現実の社会に起きた解決すべき問題を解決するために研究する。
研究成果は同業者の評価(peer-review)によって判定される(学術雑誌)。	研究成果はどれだけ現実の問題解決に役立ったかによって決まり, 社会が評価する。
学問分野が一つの共同体をなしており, 知識生産はその中で共有される。	多彩な discipline の collaboration によって研究は遂行され, その人々を含む社会の多彩な人々で知的生産は共有される。複数のモードI的な知識の中から問題解決に必要な知識を選んで配置(configuration)する。
研究成果の実践への適用は必須ではない。	研究成果の実践への適用(商品化)は不可欠である。

(註)

* trans-disciplinarity ; inter-disciplinarity では2つ (以上) の discipline が共有する共通の枠組みの中で統一され専門用語や共通の方法論で研究するのに対し, trans-disciplinarity では共通の理論的理解に基づく研究の場合にのみ成立し, それぞれの discipline の認知的な相互浸透を伴う。つまり, それぞれの discipline の枠を出たところに trans-disciplinarity は形成されるといえる。

を創出できる学問としてのオートポイエーシス、環境によって人間は大きく変わることを明らかにする学問としてのアフォーダンス心理学の3点から考察する。

2 モードIIの学問と臨床の知

大学での基礎的研究と社会における実践的研究の相互関係が密接になり、両者が対等の立場で協力(コラボレーション)して研究する図式が浮かび上がってきた。その上、オゾン層破壊・地球温暖化・環境ホルモンなどの、緊急に解決しなければならない課題が山積する事態となった。

このような事態から新しい知のかたちが出されてきた。その一つが、Michael Gibbons らの知のモード論である。

そのモード論によると、科学は大きくモードIとモードIIに分けられるという。モードIはいままでの自然科学における基礎的研究に代表されるもので、基礎医学、理学、純粋数学、基礎物理学、実験心理学などがそれに入ろう。モードIIは現実には起きている問題を緊急に解決が必要とされるときにの学問で、従来「応用的、実践的研究」と呼ばれていたものがそれに近いと思われる。両者を対比すると表1のようになる(杉原、1999)。

ここで注意しなければならないのは、モードIが第一でモードIIがその下に位置するという方向性、従属関係、優劣性はない点である。両者はお互いに協力関係(コラボレーション)を持つべきもので、モードIIの研究にモードIの研究が不要であるというわけではない。むしろ、モードIでの研究の進展がモードIIの研究を進展させることもある。

モードIの研究からモードIIの研究へ強い影

響を与え、大きく発展したものに行動療法がある。行動療法はもともと学習理論のセラピーへの応用・適用というかたちで発展してきた。行動療法は臨床場面での検証を積み重ね、つねにセラピーを現実場面に合致するように改変したために発展したと思われる。ところが、かつて学習理論の教育場面への応用・適用として教育界を賑わしたが、その後その運動は皆無の状態になったものに「プログラム学習」がある。プログラム学習は、オペラント条件付けの理論を教室での学習へ適用し、発展を遂げるはずであった。コンピューターの進歩と相まって、CAI (computer-assisted instruction)として教育界の主流となると期待された時期もあった。しかし、プログラム学習を教育実践の場で検証し、改良を加えることはほとんどしなかった。つまり、行動療法ではモードⅠからモードⅡへスムーズに移行していったのに対し、プログラム学習ではモードⅠの世界に留まったままであった。この違いが、両者の盛衰を決定的なものにしたと思われる(杉原、1999)。

モードⅡからモードⅠへの研究はほとんどなされていないように思われる。夜間修士課程が筑波大学に平成元年(1988)に創設され、その後多くの学部や大学院に夜間、ないし昼夜間制(東京成徳大学大学院はその一つ)が設けられるようになった。そこには、豊富な実践経験を有する社会人が、解決をせまられた実践的な問題を解決すべく入学して、研究を進めてきた。いまのところそこでの研究がモードⅠの研究に影響を与えるまでにはいたっていない。心理学関係でも、不登校、援助交際、学級崩壊、摂食障害、リストラによる鬱状態、がん患者の不安、死を目前にした生き方など、現実社会に起きている緊急に解決すべき課題は多くある。それらの課題を従来の心理学の理論の単なる適用では、研

究は進展せず、プログラム学習の衰退の轍を踏むことになろう。そうではなく、現実社会で起こっている解決すべき問題を実践的に解決し、それに関する研究が進めば、どのようなモードⅠの研究をしなければならないかが明らかになってくると思われる。それがまさに「臨床の知」の科学に他ならないのである。

3 オートポイエーシスと臨床の知

心理学は長い間、S-R(刺激-反応)や原因-結果などのように、機械的決定論の立場からある結果を規定する原因を明らかにし、そのメカニズムを仮説演繹的に解明しようとしてきた。明確に示せない刺激や反応、特定できない原因や結果、仮説が立てられない理論などは、研究の対象から排除されてきた。

しかし、心理学が対象とする「心」はすべて明確にでき、特定でき、仮説が立てられるものではない。むしろ。そういうことができないことの方が多いのかもしれない。もしそうであるなら、われわれは今までとは違った方法論と科学論が必要で、パラダイムの大転換が要求されることになる。

これに関連する学問の一つが、Maturana, H.Rら(1980)のオートポイエーシス(Autopoiesis)である。これはもともと生命メカニズムのシステム論として出されたが、心や社会に関する広範な現象や学問に適應されるようになった。

わが国では河本らが紹介し(1991)、独自に発展させた(1995)。それがオートポイエーシスの第三世代システム論である。ここでは第一・第二・第三システム論によって心理学の発展を見ていく。

1)第一世代システム；これは「開放系動的平衡システム」と呼ばれているもので、外的状況が

変化しても内的状況を一定に保つホメオスターシスはその一つである。これはサイバネティクスとして、ロケット工学や動物・人間の平衡状態保持のメカニズム解明に役立った。ここでは出力の一部が入力にフィードバックされ、ロケットの軌道修正がなされたり、外気の温度に合わせ発汗や汗腺調節などによって体温の恒常が維持される。心理学では、Festinger, L.の認知的均衡理論、Berlyne, D.E.やHebb, D.O.らの動機づけ理論がこの例にあげられよう。

2) 第二世代システム；これは「開放系非平衡システム」とよばれるもので、自己組織化のシステムである。「カオスから秩序へ」がなぜ起きるのか、それを説明するのがこのシステム論である。開放系というのはこのシステムが外に開かれていることを意味し、環境との相互作用の結果、カオスから新たな秩序が生まれるとされる。このような生成プロセスを明らかにしようとすると大きな特徴がある。心理学でいえば、Piaget, J.の発達理論がこれに当たると思われる。人間はあるシエマで外界を取り入れている（同化）。しかし、環境との相互作用を通して、いままでのシエマでは外界を取り入れることができなくなる。つまり、外界とシエマの間に不均衡状態が生じる。そうするといままでのシエマを変えなければならなくなる。直観のシエマで「数の保存」課題を捉え、「長く見えるほうが多い」というシエマをもっていたが、「長いが目が粗い」「取りも加えもしない」「数えてみたら数が同じだった」という現実に直面し、いままでのシエマを変えなければならなくなった（調節）。ここに「数の保存原理」というシエマが出現し、新たな秩序ができあがる。この「同化→不均衡状態→調節→均衡状態」の繰り返しが発達であるというのが Piaget, J.の発達理論である。

3) 第三世代システム；これは「閉鎖系非平衡システム」と呼ばれ、これがオートポイエーシス（自己創出／自動創出）である。これには次の四つの特徴がある。

- ①自律性；どのような変化もシステムそのものによって統制されている。
- ②個性；システムは自らの構成素を産出することによって自己同一性を維持する。
- ③境界の自己決定；システム自体で自己の境界を決定する。
- ④入力も出力もない；だから、システムは閉鎖系であり、自ら新しいシステムを創出する。

もともとオートポイエーシスは生命システム論として出てきたが、それが心的システムや社会的システムにも適用されるようになってきた。ここで問題にするのは主に心的システム論である。第三世代システムのオートポイエーシスは外部からの入力も外部への出力もない、しかし、システム内では新たな何かが生まれている、そのメカニズムをいう。しかし、それだけでは大きな発展はない。そこでカップリングという働きが重要になる。カップリングは複数の単位体の行為が、それぞれ他の行為の関数となるように作用するとき、常に起きるといふ。システムは自らの作動を通じて一貫して自己を維持する単位体であるが、システム間の相互浸透も行われる。それがシステムのカップリングであり、こうすることによって新たな高次のオートポイエーシスの単位体ができる。

システムの外から見るのと内から見るのとでは大きな差がある。そのことは「パイロットの隠喩」(Maturana, H.R., & Varela, F.J., P231) でよく理解される。闇夜に見事にランディングしたことを讃えられたパイロットは、計器の数値を一定に保っていたに過ぎなかったので困惑したという話である。

オートポイエーシスの考えから、筆者はゲシュタルト心理学を再考してみた。たとえば有名な「平行四辺形の面積を求める問題」を解く Wertheimer, M.の実験を考えてみよう。平行四辺形の片端に垂直線を引き、できた直角三角形を他端にあわせると長方形となり、平行四辺形の面積は(底辺の長さ×高さ)で求められることがわかる。平行四辺形が長方形になることがなぜわかるようになるのか。それは「場の再構造化」で解釈されてきたが、洞察のときに起こる「アッ!体験」なども含め、ゲシュタルト心理学をオートポイエーシスで再考できるかもしれない。

フィールドワークや臨床場面では参加(与)観察法が重要な方法である(箕浦 1999)。オートポイエーシスでは内から観ることの大切さが強調されていた。渡辺容子(2001)は自ら乳がんに冒されながら乳がん患者についての修士論文を書いた。彼女の研究を見守ってきた筆者はその研究経過をどう解釈したらいいかがわからなかった。テーマの適切さ、自分自身の手術および治療、それに加え父親の入院看病などの過酷な状況での研究進行、質問紙の作成(信頼性、妥当性の検討を含む)と333名の乳がん患者への実施と分析、5人の患者へのインタビュー、それらを基にした心理的回復モデルの構築、125ページ(1ページ1080字)の論文の書き上げ、これを約4ヶ月で成し遂げた。彼女の能力と努力もあるが、それだけでは説明がつかない。乳がん患者についての心理学的研究は多くあるが、患者自らが患者の研究をするときにまさにオートポイエーシスが働いたのではあるまいか。研究の中に「がん患者になってよかった」という内容もでてくるが、これも乳がん患者を内から観た結果ではないかと思う。

4 アフォーダンスと臨床の知

アフォーダンス(affordance)というのは Gibson, J.J.の造語で、afford(・・・がある、・・・ができる、与える、供給する)を名詞化したものである。生命はある環境の中で生きており、生命活動は環境抜きでは語れない。もともとこれは、Gibson, J.J.& E.J.らの知覚研究者が、知覚は独立にあるのではなく、どういう環境のもとで知覚されるかが問題である、というところから出発した。実験室内の知覚と生活環境内の知覚では大きく異なることが明らかにされ、「生態学的に意味のある環境刺激」(Gibson, E.J. 1969)の重要性が主張された。これは生態学的妥当性(ecological validity)として、知覚以外の分野でも問題にされた。

その一つは4枚カード問題で、「表が奇数なら裏はアルファベットの母音でなければならない」という抽象的な Wason 課題と、売り場の支配人になったつもりで「5000円以上の伝票の裏には印鑑を押すという決まりを守っているかどうか」を調べるといふ課題を解かせると、問題の論理構造は同じなのに後者の正答率が断然よかった。同様に、ブラジルのストリートボーイは学校での計算能力は極めて低いが、路上で売るキャンディーの仕入れ値に適正なもうけを加え売値を決めるときの計算能力は驚くべきものがあつた。ピアジェの保存課題でもおみやげをもらう場面になると正答率は増加する。これらはすべて生態学的妥当性が重要であることを示している。

最近、Edward S. Reed(1996)は *ENCOUNTERING THE WORLD* という著書を著している。ここでのキーワードの一つはエンカウンター(encounter)である。訳書ではこれを「切り結ぶ」と訳されているが、「お互いに刀を交えて激し

く切り合う」という意味である。この本は、ミミズの行動から人間思考や言語までの広汎な対象を取りあげているが、人間、とりわけ子どもの発達では「二人の人と一つの物との間の三項的な相互行為（三項関係 triadic interaction）」が重要だという。現実生活の中での認知や行動は、環境によって決定されるわけではないが、環境と切り結ぶことによってなされる。つまり、環境とのエンカウンター（切り結ぶこと）によって人は大きく変わりうるのである。

プレイセラピーで吃音が直る、言葉が出る、夜尿が直る、凶暴な行動が収まる、こうなるのはなぜであろうか。キャンプ生活を送ると、生活の自立ができなかった子どもが生活習慣の完全な自立ができる、偏食の激しい子がなんでも食べるようになる、山登りや沢登りに挑戦し、終わった後「やった！」と歓声をあげる、このようになるのはなぜか（杉原 2000）。遊びや自然にはそういうパワーがあるというだけでは説得力がない。子どもはプレイセラピー場面で、セラピストと自分が受容的なプレイルームの中で切り結んでいるのではあるまいか。また、キャンプ生活場面では、他の子どもたちやスタッフと自分が家庭とは異なった生活の場で切り結びが行われているのであろう。セラピーやカウンセリングやキャンプでの信じられないような変化がなぜ行われているかは、どのような三項関係が成立しているのかを分析すれば明らかになるかもしれない。

5 「臨床の知」の発展

このように見てくると、臨床の知の発展には、なにより実践の場で起きる問題の解決に向けて、クライアントがどのような環境と切り結んでいるかを深く考察し、実践者の立場で問題解

決に当たることが必要になる。そのためにはフィールドワークの技法（箕浦、1999）の習得も必要になるであろうし、事例研究法などの質的研究の方法を確立すること（Patton, M.Q., 1990）も重要になる。

大量のデータをもとに general theory を導き出すという研究には生態学的妥当性が欠ける傾向がある。特に、臨床の知では、主観的・共感的・実践的・個別的理解の local theory が重要となる。

参考文献

- Gibbons, M., Limoges, C., Nowotny, H., Schwartzman, S., Scott, P. & Trow, M 小林信一（監訳）1997 現代社会と知の創造—モード論とは何か 丸善ライブラリー（Gibbons, M., Limoges, C., Nowotny, H., Schwartzman, S., Scott, P.&Trow, M 1994 New Production of Knowledge:The Dynamics of Science and Research in Contemporary Societies Sage Publications of London）
- Gibson, E.J. 小林芳郎（訳）1979 知覚の発達心理学 田研出版（Gibson, E.J. 1969 Principle of Perceptual Learning and Development Prentice-Hall, Inc.）
- 河本英夫 1995 オートポイエーシス—第三世代システム 青土社
- Maturana, H.R., & Varela, F.J., 河本英夫（訳）1991 オートポイエーシス—生命システムとはなにか 国文社（Maturana, H.R. & Varela, F.J. L 1980 AUTOPOIESIS AND COGNITION: THE REALIZATION OF THE LIVING D.Readel Publishing Company）
- 中村雄二郎 1992 臨床の知とは何か 岩波新書 203
- Patton, M.Q.1990 Qualitative Evaluation and Research Methods, SAGA

箕浦康子（編著）1999 フィールドワークの技法と
実際 ミネルヴァ書房

Reed, E.S. 細田直哉（訳）2000 アフォーダンスの
心理学—生態心理学への道 新曜社(Reed, E.S.
1996 ENCOUNTERING THE WORLD Toward an
Ecological Psychology Oxford University Press,
Inc.)

杉原一昭 1999 心理学における基礎的研究と実践
的研究—教育心理学を中心とした「モード論」
からの考察— 筑波大学心理学研究 第21号
127-134

杉原一昭 2000 子ども破壊 立風書房

渡辺容子 2001 乳がん治療における決定コントロ
ール感が心理的回復に及ぼす影響 筑波大学教
育研究科 修士論文（未公開）